

国立国語研究所学術情報リポジトリ

概要

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002500

概要

1. 目的

本報告書は、国立国語研究所が2017年1月に石川県白山市白峰で行った調査の報告を行うものである。本調査は、国立国語研究所における「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」(機関拠点型基幹研究プロジェクト)および「方言の記録と継承による地域文化の再構築」(人間文化研究機構・広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」)という2つのプロジェクトの共同研究として行われた。それぞれのプロジェクトの目的は以下のとおりである(国立国語研究所のホームページより)。

「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」

いま、世界中のマイナー言語(規模の小さな言語)が消滅の危機に瀕しています。現在、6,000から7,000ある世界の言語のうち、半数がこの100年のうちに確実に消滅し、最悪の場合、10分の1、20分の1にまで減ると言われています。その背景には、人口の都市集中化により周辺地域の人口が減少してしまったこと、社会的・経済的理由によりマイナー言語を使っていた人々がその言語の使用をやめてしまったこと、災害や紛争により人々が生まれた土地を離れなければならなくなったことなどの状況があります。

マイナー言語の消滅に関しては、次のような意見もあります。言語の消滅は社会変化の結果であってしかたがない。あるいはもっと積極的に、言語は統一された方が便利だ。危機言語を守る必要はない。

しかし、そもそも、なぜ、言語が多様になったのか考えてみて下さい。おそらく、各地の言語は地域の自然や人々の生活、ものの考え方などに基づいて、長い時間をかけて形成されていったのだと思われまます。それらが消滅するということは、長い歴史の中で醸成された人類の智慧が失われてしまうことを意味します。生物の多様性が地球を豊かにしているのと同じように、言語の多様性は人類を豊かにしているのです。

このような状況に警鐘を鳴らしたのが、2009年のユネスコの「消滅危機言語」の発表です。2,500の消滅危機言語のリストの中には、日本で話されている8つの言語—アイヌ語、八丈語、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語—が含まれています。しかし、消滅が危惧されるのはこれだけではありません。日本各地の伝統的な方言もまた、消滅の危機にあります。これらを記録し、その

価値を訴え、継承活動を支援することがこのプロジェクトの目的です。

「方言の記録と継承による地域文化の再構築」

地域社会の変貌により、地域の貴重な文化資源である方言が急速に衰退しつつある。本研究では、自治体や各地の大学・研究者と連携して地域の方言の記録や方言の継承活動を行うことにより、方言を主軸とする地域文化の再構築の可能性と方言のもつ文化的意義について研究を行う。

国立国語研究所では、2010年から奄美沖縄地方、八丈島、出雲、宮崎県椎葉、島根県隠岐の島などで合同調査を行ってきたが、今回の白峰調査は北陸地方における初の合同調査であった。

2. 調査地点について

本調査は石川県白山市白峰で行われた。白峰は石川県の南部、白山国立公園の麓に位置する（位置については地図 1, 2 参照）。福井県、および岐阜県と接している。豪雪地帯であること、また、近世、石川県が加賀藩の領地であった中で、白峰は天領であったことがよく知られている。

白峰は現在白山市の一部で、白峰地区と呼ばれているが、以前は石川郡白峰村（2005年まで）であり、さらに古くは能美郡白峰村（1949年まで）という自治体であった。旧白峰村は、桑島、下田原、赤谷、白峰、風嵐、大道谷、明谷、風嵐谷、河内谷、市之瀬、赤岩、三ツ谷という地区に分かれていた（白峰村史編集委員会 1959）。したがって、「白峰」と言うとき、2つのことを意味しうる。旧白峰村全体を指す場合と、その中心地であった地域（かつては牛首と称された）を指す場合と、である。本報告書で対象とするのは、主として旧白峰村牛首方言が中心となるが、一部、牛首方言と言語的共通点の多い大道谷の方からも方言を教えていただいた。

白峰は、かつては農業、林業が主な産業であった。特筆すべきこととして、「養蚕」、「出作り」、「焼き畑」があげられる。「養蚕」はかつては各家庭の大きな収入源であった。現在でも二階に養蚕用のスペースがある伝統的な家屋も残されている。「出作り」とは、人口の密集している集落から離れて、出作り小屋を建てて山地で耕作を行うことである。平地の少ない山間部ならではの生産方法で、毎年冬近くなると山を下り、雪が少なくなると里から山に帰る「季節出作り」と、山の住まいを本拠とする「永久出作り」がある。「出作り」では、樹木や草を伐採し火入れを行い、斜面の山林を耕地化する「焼き畑」が広く行われていたが、1970年代以降急激に衰退してしまった。この報告書には、白峰を特徴付けるこれらの民俗語彙も調査結果に多く含まれる。



地図1 白峰の位置（日本全図）



地図2 白峰の位置（石川県）

また、浄土真宗がひろく信仰されている地域であるということも特筆されるべき点である。白峰地区には、3つの浄土真宗の寺が存在し、旧来より白峰の人々は厚い信仰のもとに

生活を送っていた。今回の調査結果の例文にも「ホンコサン（報恩講）」などの語が何回か確認できる。

2017年12月末現在の人口は828名である（白山市ホームページより。2018年2月5日確認。http://www.city.hakusan.ishikawa.jp/data/open/cnt/3/3124/1/jinkou_H2912.pdf）

3. 白峰方言に関する先行研究

白峰は周囲の言語と著しく性質の異なる「言語の島」とされている。言語の特徴については、以下の文献を参照されたい。

岩井隆盛（1959）「白峰（牛首）方言概要」, 白峰村史編集委員会編『白峰村史 下巻』, 白峰村役場, pp. 276-321.

岩井隆盛（1962）「白峰方言の分布と変化」, 白峰村史編集委員会編『白峰村史 上巻』, 白峰村役場, pp. 425-451.

加藤和夫（1996）「白山麓白峰方言の変容と方言意識」平山輝男博士米寿記念会編『日本語研究所領域の視点 上』, 明治書院, pp. 323-345.

加藤継満津・加藤和夫（2005）『石川県白峰村方言の生活語彙辞典』, 白峰村.

新田哲夫（1985a）「石川県白峰方言のアクセント体系」『金沢大学文学部論集文学科篇』5, pp. 97-115.

新田哲夫（1985b）「白峰方言のアクセント素の所属語彙—1～3 モーラ体言—」『日本海文化』（金沢大学文学部）12, pp. 1-42.

新田哲夫（2002）「石川県白峰方言の形容詞—語形とアクセント—」『消滅に瀕した方言アクセントの緊急調査研究』（平成14年度文科省科学研究費補助金報告書2002-A4-013）3, pp. 143-171.

新田哲夫（2003）「石川県白峰方言の動詞アクセント」『アジア・アフリカ文法研究』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）31(2002), pp. 1-25.

新田哲夫（2004）「NHK全国方言資料（石川県石川郡白峰村字白峰）改訂と注釈」『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』24, pp. 29-63.

新田哲夫（2005a）「NHK全国方言資料（石川県石川郡白峰村字白峰）改訂と注釈（承前）」『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』25, pp. 123-154.

新田哲夫（2005b）「石川県白峰地方の方言特徴と方言テキストの語法」『金沢大学フィールド文化』1, 金沢大学文学部

新田哲夫（2006a）「方言に見られる生き物名に付く接尾辞「メ」—石川県白峰方言を中心に—」真田信治監修『日本のフィールド言語学』, 桂書房, pp. 122-143.

新田哲夫（2006b）『石川県白峰方言の調査研究と方言語彙のデータベース化』平成16～17年度科学研究費補助金報告書, 基盤研究(C)課題番号16520275, pp. 1-166.

新田哲夫 (2009) 「白山麓白峰の方言特徴と昔話に見られる方言の語法」『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇』1, pp. 15-56.

新田哲夫 (2010a) 「白山麓白峰の方言特徴と昔話に見られる方言の語法(2)」『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇』26, pp. 1-92.

新田哲夫 (2010b) 「石川県白峰方言の複合動詞アクセント」上野善道監修『日本語研究の12章』, 明治書院, pp. 413-428.

新田哲夫 (2016) 「白峰方言のプロソディーの諸問題 —アクセント体系および複合名詞アクセント—」, 国立国語研究所 キックオフワークショップ「語のプロソディーと文のプロソディーの相互作用」ハンドアウト, 国立国語研究所, 2016.1.11

4. 調査について

調査は2017年1月21日(土)と22日(日)に白山国立公園センターで行われた。調査内容は以下のとおりである。

- ・調査内容： 文法一般(用言の活用含む)
アクセント
語彙(基礎語彙・民俗語彙)
自由談話の録音

以下の方々が我々に方言を教えてくださいました。年齢は調査当時である。なお、ここにお名前を掲載していない方々からも方言を教えてくださいました。みなさまに深くお礼申し上げます。

織田捷二さん(1942年生・74歳)

織田清勇さん(1928年生・88歳)

加藤さん(1938年生・78歳)

小田直一さん(1937年生・79歳)

殊才幸吉さん(1928年生・88歳)

竹巴さん(1935年生・81歳)

尾田好雄さん(1933年生・83歳)

山口幸一さん(1942年生・74歳)

山口甚四郎さん(1937年生・79歳)

山田喜一さん(1933年生・83歳)

概要

調査者は以下のとおりである。所属は調査当時のものである。

上野善道（東京大学）、大槻知世（東京大学）、乙武香里（国立国語研究所）
木部暢子（国立国語研究所）、小西いずみ（広島大学）
佐々木冠（札幌学院大学）、佐藤久美子（国立国語研究所）
當山奈那（沖縄国際大学・日本学術振興会）、中澤光平（与那国町教育委員会）
新田哲夫（金沢大学）、原田走一郎（国立国語研究所）
松倉昂平（東京大学）、山田真寛（国立国語研究所）

参考文献

白峰村史編集委員会編（1959）『白峰村史 下巻』，白峰村役場。

謝辞

調査にご協力くださいました方々に心よりお礼申し上げます。また、山田喜一さん、山口幸一さん、山口隆さんには調査の調整などで大変お世話になりました。ありがとうございました。